

## プノンペンで、市民による「まちづくり」を考える

### ●趣旨

現在、プノンペンは未曾有のスピードで発展を遂げ、常に街のどこかで工事が行われている。急激な都市成長の中で、プノンペンの景観は独自の美しさを保つことができているのだろうか。プノンペンの都市景観と、まちづくりの主体であるべき市民が描く、プノンペンの理想像とはどのような街か、調査する。

### ●動機

私は、大学の卒業論文で『東京の都市景観を考える～記憶と忘却の視点から～』という題目のもと、東京の都市景観について研究した。しかし、執筆中も常に私の頭の隅には二年前に訪れたプノンペンの街並みがあった。急増する高層ビルや溢れる自動車からは活気を感じると共に、外から与えられるものにプノンペン独自の美しい景色が飲み込まれてしまう恐れを抱いた。そしてそれが、戦後東京の姿と重なって見えたのだ。プノンペンが、現地の人々が快適に暮らせて、かつ本来の個性・文化を兼ね備えた美しい都市であって欲しいという願いから、以下の調査を行った。

### ●調査の概要（対象・期間・項目など）

対象地域：カンボジアの首都 プノンペン

期間：2015年2月6日～2015年2月11日

方法：

- ①現地でカンボジアの課題解決に取り組む日本人の方や、進出する日本企業に務める方などにインタビューを行った。
- ②自分でプノンペンの街を歩くことで、街が持つ魅力・課題を検討した。
- ③プノンペンの児童や大学生を対象に、自分自身の頭でプノンペンの将来像を考えてもらうワークショップを開いた。

### ●調査結果

①～③の調査結果について、それぞれまとめる。

#### ①インタビュー結果

現地で課題解決に取り組む日本人の方、現地に長年暮らしている日本人の方、進出する日本企業に務める方、カンボジア研究者など、計6名にインタビューを行った。

インタビュー結果を、実施日が早い順に見ていく。なお、お名前前の記載については、各々のご希望によ

り伏せさせていただく場合がある。

## I、子供を支援する NGO 勤務 M 氏

インタビュー実施日：2015年2月7日

〈質問回答〉

Q1.プノンペンの都市開発は、個性・文化への配慮がなされていると思うか。

A1.企業の利益追求が優先で、結果的に便宜を図った政府高官の資産が増える仕組みになっている。プノンペンの地価はここ 10 年くらいで急騰。理由は主に中国や韓国企業の進出。土地の売買で儲けた人もかなり多くいて、貧富の格差は広がっている。プノンペン市を囲むカンダール県でさえも、工場がどんどん増えてきて地価は上がり、農村が少なくなっている。農村部では担保付の農民への資金貸付（＝マイクロファイナンス）が行われるようになったが、持ち慣れないお金を手にしてしまった農民の中には、使い方がわからないために、農業への投資ではなくテレビやオートバイなどの購入にお金を使い果たし、最終的に返せなくなる人もいる。よって農地も手放すことになり、都市に出てきて、スラムを形成する。政府は外からの目もあるので代替地を用意するようになったが、町の中心部から離れすぎていて、莫大な交通費がかかったり、仕事が見つからないケースがほとんど。もし法律があっても、力のある人がイエスといえばイエスとなるため、関係なくなってしまう。

Q2.私は日本の戦後と重なるのだが、どう思うか。

A2.みんな自由に建てているという点では、そう言えるのかもしれない。

Q3.フランスが作成したマスタープラン2020についてどう思うか。

A3.カンボジアでその存在を守っている人おろか、存在を知っている人はほとんどいないと思う。作っただけで、機能していないのではないかな。

Q4.プノンペンという街の魅力とは。

A4.景観はここ10年で驚くほど変わったけど、人は変わらないこと。

Q5.日本の ODA の使われ方に対して思うことは。

A5.ODA は国対国。あくまで相手国政府の要望に応えるもの。だから、国の人が本当にそこの住民たち

のためを思って作るならいい ODA になる。しかし ODA を誘致する現地の企業は住んでいる人よりも自分の利益を優先。一部の人の利益にはなっているけど、実際に住んでいる人は被害を被るケースも多い。外務省 NGO 政策協議会では、NGO 側はその検証をずっと外務省に求めている。新しい ODA を入れる前に、過去の検証、成功した事例よりも住民に被害を与えた事例の原因を検証すべきという考え方。政府の開発援助は、外交政策の面も大きい。もちろん JICA や、ちゃんと考えている人も一部はいるが、ODA は向こうの政府に取り込むためのもので、その先にあるものは知らないというスタンスも感じられる。

Q6.子供たちのために、今後プノンペンがどのような街になってほしいか。

A6.交通事故が少ない街になってほしい。交通事故で亡くなる人がすごく多い。子供の命も、親の命も。ヘルメットの徹底や、交通規制を今後どうしていくか。

## II、プノンペンに約10年滞在されている F・T 氏

インタビュー実施日：2015年2月7日

〈質問回答〉

Q1.外国企業の手によってカンボジアの個性が失われることを恐れているが、それについて思うことはあるか。

A1.外国の色々な文化がどんどん入ってきてる。その事はある程度仕方が無いと思うが、ゴミの状態がひどいと思う。何にしても法律が作られている段階だから、色んなことが今発展中。法律は作られて終わりじゃなくて、人々になじませるのにも時間がかかる。ただ、街の構造は放射状に分かりやすく作られているので、街づくり計画を行う際の素地はしっかりしていると思う。

Q2.日本の ODA の使われ方に対して思うことは。

A2..JICA ボランティアは職種や関わっている仕事の内容が違っても、みんなが現地の人々の生活に入っていって、草の根レベルで現地の人々に喜ばれるように活動していければいいと思う。ボランティアの話で言えばそういうことになるが、橋を造ったりだとか、そういう大きな金額が動くものはなかなか表面上に出てこない。ボランティア活動も ODA も、人を育てるために使われるべきだと思う。この国

では人材育成が重要で、最終的には現地の人だけで回せるようになればいい。

**Q3.** プノンペンという街の魅力とは。

**A3.** 平らなので、自転車でどこへでも行ける。交通渋滞がなければとても住みやすい街になると思う。

シェムリアップもかつては静かで落ち着いた所だったのに、ここ10年余りで一気に観光地化して騒がしくなってしまった。昔を知っているからこそ、今訪れても「ああよくある観光地になったな」と思ってしまう。

**Q4.** カンボジアに求めるインフラは。

**A4.** きれいなトイレ施設。田舎に行ったら水道すら通っていないから、病原菌が心配。そういうところにボランティアが入って、衛生教育ができればいい。外から来るお客さんのためには、世界遺産登録も大事だが、そうした基本的なことも大事。あとは、ゴミの分別。ハコ物は至る所に作られていても、維持管理等にやや難がある様な場合が時々見受けられる。

**Q5.** 日本ができることは。

**A5.** 良い習慣の定着。とても身近なことで言えば、横割りしてくる人やバスでのマナーを守らない人を注意したり、職場でのモラルも大事。残業に対する正当な対価の支払いや正当な労働時間、休日の確保、様々な休暇制度の導入等。現地の人を低賃金で酷使するのではなく、日本人を含む外国人が率先して良い職場環境づくりを目指して欲しい。

**Q6.** 今後プノンペンがどのような街になってほしいか。

大きいスーパーが増えるよりも、カンボジアでよく見るような、小さな商いが多い方が幸せ社会であるように感じる。相互扶助がどんどん減ってしまわないように。私たちは常に欲望を刺激され、その消費活動に必要な金銭を稼ぐ社会に住んでいる。もちろん欲望をなくす事はできないが欲望はコントロールした方が幸せになれるのかも知れない。人々の消費欲を刺激し続ける街より、人の心を充実させる文化や芸術の雰囲気が溢れるような街になって欲しい。

### Ⅲ、JICA にて都市交通の問題に取り組む A 氏

インタビュー実施日：2015年2月8日

A 氏は、JICA にて都市交通の問題に取り組んでおり、初めにプノンペン市と協働で作成したマスタープ

ラン（「PHNOM PENH CAPITAL CITY URBAN TRANSPORT MASTER PLAN」）について、詳細にご説明して下さった。内容を以下にまとめた。

当マスタープランは、**2035年**をターゲットにし、**2012年**から**2年**間かけて作成したものである。

#### <現状>

- ・ **2012年**の車の平均時速を**2001年**と比べると、四輪自動車（以下、自動車）の増加により遅くなっている。つまり渋滞が増加している。
- ・ **2012年**の段階では、公共交通機関が何もなく、人々が移動に使う手段の割合は、バイク…**52%**、歩行…**24%**、トゥクトゥク…**14%**、自動車…**10%**である。
- ・ 歩道に大きくはみ出す自動車の路上駐車が問題となっている。

#### <2035年までの予測>

- ・ **2035年**には、人口が現在の約**180万人**から約**100万人**増加すると見込まれている。
- ・ 市民に対して「どのような街にしたいか」という調査を行った際には、①若者がつくる力強い都市活動②高度で便利な交通③職場と自宅がより近い新しいライフスタイル④豊かな都市環境、という**4**つのコンセプトが浮かび上がった。
- ・ プノンペンは今後、西側に拡大していくと予測される。
- ・ 今後予測される自動車の増加に対して、道路だけを増やしても渋滞は減らないし、資源は限られている。道路整備はもちろんだが、プラス公共交通機関を入れることと、交通管理を整えることで進めていく。需要（個人の車）を減らし、供給（道路、交通機関など）を増やす。
- ・ 具体的には、まず**2020年**までにバスの整備、次に**2035年**までに鉄道の整備、と段階的に進めていく。
- ・ 道路は環状線を増やすことで、街中に大型トラックなどを入れないようにする。
- ・ **JICA** が優先したいのはバスの整備。去年社会実験としてバスを**1本**走らせたところ好評だったため、現在は**3本**に拡大。**2015年**に**10本**まで拡大することが目標。
- ・ 信号の付け替えと、管制センターを作って臨機応変に信号をコントロールできるようにする。
- ・ 将来的には鉄道を整えて、空港とのアクセスをスムーズにする。

〈質問回答〉

Q1.プノンペンの都市景観に対して、思うことは。

A1.都市交通の観点からは路上駐車を問題視している。道の両側に車やバイクが停まっていて本来の車線が活用できていない。車を停めていい場所を決めるだけでも、すっきりすると思う。

Q2.日本のODAの使われ方に対して思うことは。

A2. 有償・無償・技術協力の3スキームを活用し、相手国の多様なニーズに合わせた支援を行うことができる点が強み。インフラ案件でもソフト面支援を組み合わせしており、例えば無償での支援が予定されている信号のプロジェクトでは、日本の信号システムを活用し、市内100か所の信号の付け替え及び管制センターでのコントロールを行う。これらのシステム導入に加え、職員の能力向上、ドライバーへの啓蒙活動や停止線を引く等のソフト面の支援を取り入れることで、システムがより効果的に且つ持続的に活用されるよう考慮している。

Q3.開発による強制立ち退きの問題について、具体的なケースをご存知か。

A3.中国企業が湖を埋め立てて無理やり開発を進めようとしたときに、世銀がカンボジアへの支援をストップした。JICAではそのようなことを防ぐために、「環境社会配慮ガイドライン」というものを作っている。このガイドラインは、プロジェクトを行う前に、環境影響をいかに軽減するか、今後いかにモニタリングしていくのかといった手順や、住民の方への補償や異議申し立ての権利について定めたもの。

Q4.日本ができることは。

A4. 信号や新交通システムなどの日本の優れた技術の導入に加え、運営組織の在り方などソフト面についても同時にきめの細かい支援を行うことができる。

Q5.プノンペンの街の魅力は。

A5.活気に溢れていること。外資への規制も少なく自由な国である。渋滞への対応は深刻化してからでは遅いので、ここ10年が勝負ではないかと感じる。

また廃棄物処理の現状についてのご質問をしたところ、後にメールでご回答いただいたので、以下にまとめる。

- ・ 廃棄物処理には四つの区分がある。①シントリー社（一般廃棄物、各家庭より電気料金のインボイ

スに含める形で料金徴収)、②赤十字(医療関係廃棄物、無料)③ダムコー市場から出た廃棄物(近くの市場より徴収)④工場から出た廃棄物(工場より徴収)である。

- ・市全体で発生する廃棄物(2200トン/日)のうち、7-80%程度しか処理できていない。

2015年に収集場が容量を超えるため、2015年以降の収集場を探す必要がある。以前は焼却していたが、現在はすべて埋立て。

- ・市が抱える問題点は2点あり、①発生する廃棄物を100%収集できない。②収集場において適切に焼却する技術がない。①については上述の民間会社に収集車や時間帯を増やすように依頼しているが、対応できなければ別の方策を考える必要がある。現在アジア財団の支援で収集車にGPSをつけて100%収集を目指す取り組みをしている。

- ・廃棄物収集の場所が指定されておらず道に溢れていること、また収集車が都度車道に停車することも渋滞を引き起こす要因である。

#### IV、JICAにてボランティア調整を行う W氏

インタビュー実施日：2015年2月10日

W氏には事前にインタビューをお願いしていなかったにも関わらず、現地でのご縁があってお話する機会を頂けた。

お話だけたことを以下にまとめた。

- ・何と言っても問題なのは教育レベルの低さ。基礎学力の低さに起因する問題は、よく言われているとおりで、従業員に「就業のための研修」として読み書きや簡単な計算を教える日系企業もある。さらに、学校に生徒会活動や部活動がないことも、カンボジアの会社やコミュニティでリーダーが育ちにくい大きな要因の一つになっている。例えば部活で友人と共に音楽を楽しむことを知れば、その経験から協調性が育ち努力することも学べるわけで、学力以外の面でも学校教育は重要なのだと改めて気づかされる。無秩序な開発の犠牲者となって強制移住を強いられた人々も、無知に付け込まれている印象。どういう手順を踏んだら自分の権利を守れるのかを知らない。だから、教育が大事。

- ・経済成長と都市景観の整備を同時進行させることは、政府に適切なリーダーシップを取れる人材が極めて少ない現状を考えると、不可能に近い。景観法などが出来るのは50年くらい後かもしれない。

- ・シソワットキーの対岸には無秩序にビルなどが建ちつつあるが、あの周辺は今から計画的に整えれば地元の人の憩いの場としての機能が維持され、さらには風光明媚な観光地にもなりうると聞いたことがある。

- ・ODAに無駄遣いはないと確信を持ってと言える。なぜなら、巡り巡って結果的に日本に返ってきているから。

- ・内政干渉にならぬよう留意は必要だが、持っている国が持っていない国を助けるのは人間関係と同じで、当たり前のことだから、ODAそのものを不要とする批判は受け入れがたいし、効果を最大化する

努力は続けられている事を強調したい。

#### V、カンボジアの工業団地開発計画に携わる B・Y 氏

インタビュー実施日：2015年2月23日

B 氏へのインタビューは、カンボジアでの調査終了後、日本で行ったものである。

〈質問回答〉

Q1.現在、事業計画やマーケティング調査の段階だと思うが、現状と、計画を進める上での困難は？

A1.カンボジアでは、ビジネスがまだ発展しておらず、ビジネススキルが未熟なところがある。踏むべきステップがわからないために、スケジュール調整などに時間がかかる。

Q2.外資の規制があまりなく自由な国と聞いたが、実際どうか。

A2.規制が少ないのは本当で、やりやすい。でもルールがないからこそ、自分たちにノウハウがないとできないし、手間はかかる。

Q3.外国の土地に建造物を造る上で、留意していること。

A3.①土地の権利書②地盤③自然災害のリスク、の三点は必ずチェックする。

Q4.開発される土地で、居住権がない人への強制立ち退きが行われるときがある。建設予定の地区は今日どのように使われている土地なのか。

A4.今は田んぼ。その土地を使う上で問題は発生していない。

Q5.現地調査で感じた大きな問題点が、公共交通機関がほぼないことと、ゴミ処理の問題であった。これらの問題について、どのような考えをお持ちか。

A5.都市交通はどこの発展途上国も直面する問題で、カンボジアもそろそろやらないといけない問題。

ゴミ処理は、日常的にお金が使われるものではなく、企業としてはお金になりにくい。国策として対処していく必要がある。上水は改善されつつあるけど、下水はまだまだらしい。

Q5.日本の ODA の使われ方に対して思うことは。



A5.ODA は国対国のもので、相手国にとっては職を生み出すことにも繋がる。ものありきの ODA よりも、民間の場合「ビジネスとして成立するかどうか」ということを常に考えるといった点で、資金がどう使われるのか度々精査されるため、お金が有効的に使われる場合もある。政府は許認と資金提供だけ、動くのは民間、といった官民連携もよく取られる。

## VI、東京大学 大学院総合文化研究科 山田裕史氏

インタビュー実施日：2015年2月27日

現地では土地収奪問題に関する調査を十分に行えなえなかった。カンボジアの現代政治を専門とする山田氏へのインタビューは、プノンペンから帰国後、日本で行ったものである。  
お話いただいたことを以下にまとめた。

- ・カンボジアには「ELC＝経済的土地利用権」という、企業が政府から譲渡された土地を利用する権利がある。ELC によって、地域住民が家を焼き払われたり、重機で壊されたりして、居住していた村からの退去を強いられるケースが深刻な問題となっている。しかし、“合法”とされる ELC を持つ企業に対して、法律も知らず字も読めない住民は裁判で勝つことが出来ない。
- ・ポルポトが政権を握っていた1975年4月～1979年1月の間に、「国のものは全て国のもの、私有財産はない」とされ、土地権利などを記した書類は全て燃やされた。
- ・1980年代に、それぞれの地目について定められた1人あたりの面積に世帯構成員数を掛け合わせて算定された面積を分配した。つまり、構成員数に応じて公平に土地が分配されたのである。しかし、1980年代末に始まった市場経済化への移行期に、至るところで土地の売り買いが行われるようになる。そして、92年初めの土地法が作られる。
- ・2001年、2回目に作られた土地法が現行のものであるが、土地法の中に土地登記に関する方法が規定されている。土地法に基づく土地の登記が始まってからまだ10年ちょっとしか経っておらず、まさに今整い始めた段階である。
- ・内戦が続いたことから、まずは自分が生き残るのに必死で、公共意識があまり育たなかった。
- ・プノンペン都が作る都市計画のマスタープランが、実際に住んでいる人の生活利便性の向上や、環境改善に繋がっているかは疑問がある。
- ・自分が見たこともないビル郡は発展の象徴であり、憧れを抱くのは当然のこと。

・現在のフン・セン首相の在任が30年続いたために、首相が制度の一部のようなどころがある。カンボジアでは指導者の交代が制度化されておらず、次の選挙がターニングポイントになるかもしれない。

## ②街を歩いて、気付いたこと。

- ・道路脇、川沿い、街の至る所にゴミが散乱している（添付資料①写真①）。また、住宅地のすぐ近くにむき出しのゴミ山があり、生ゴミのにおいがひどい。
- ・車線や横断歩道が設けられていない道路が多く、プノンペンに到着した初日に事故を目撃した。歩道をバイクがショートカットのために通ったり車が停車したりするため、安心して歩道を歩くことが出来ない。また、ヘルメットをせずに二人乗りをしている人も多く見かけた。（＃写真②）
- ・シソワットキーからはトンレサップ川とメコン川が望め、街の喧騒から少し離れた景色が広がる。観光客や、憩いの時間を過ごす人々の姿が多かった。しかし、対岸に見える一つの大きな建物がその落ち着いた景色を壊していた（＃写真③）。
- ・巨大施設のすぐ隣に、まだ残存するスラムが隣接していた（＃写真④）。この国の格差を象徴しているように感じた。
- ・国立博物館や、その隣にある王立芸術大学の外観は、伝統的なクメール美術が生かされていて美しい（＃写真⑤）。
- ・街を歩いてみると、街の区画自体はしっかりしている印象を受けた。ワットプノンから放射状に大通りが延び、細い道路は碁盤の目のようになっているため、何番目の通りかを覚えていれば道に迷いにくい。

## ③ワークショップ結果

現地の子供たちに、「プノンペンは自分たちの街である」という意識を持ってもらうために、ワークショップを行った。まず初めに世界の諸都市や東京、プノンペンの写真を見せてどの街が好きか聞いた。東京の街並みの変遷について説明をした。最後に、プノンペンの将来像を自分自身で考え、絵で描いてもらった。詳しい内容は、添付資料②を参照していただきたい。

対象は、一つ目が日本の NGO が現地の市民団体と協働で運営する「SCADP」という寺子屋教室に住む約 30 名の児童、二つ目がプノンペン大学の日本語学科に通う 11 名の大学生である。

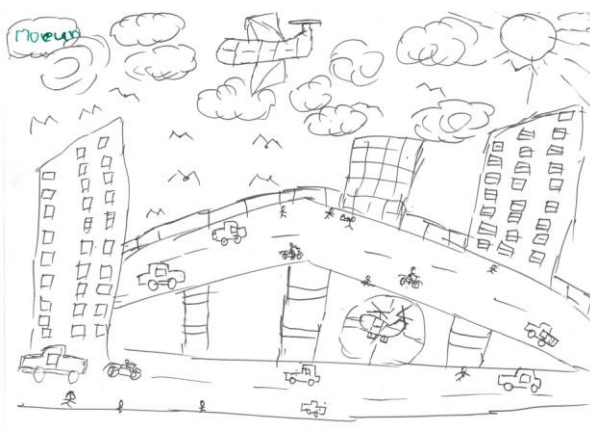
### I、SCADP におけるワークショップ結果

- 1、世界の街の写真では、「ベルギー」、「プノンペン」、「カンボジアの農村」が人気だった。
- 2、日本の写真では、「歴史的街並み」、「農村」が日本らしいという声が多かった。
- 3、東京の写真では、「丸の内」、「銀座」、「品川」、「自由が丘」が人気だった。
- 4、子供たちが描いてくれた「住みたいプノンペン」の絵は以下である。

男の子①



男の子②



男の子③



女の子①



女の子②



女の子③

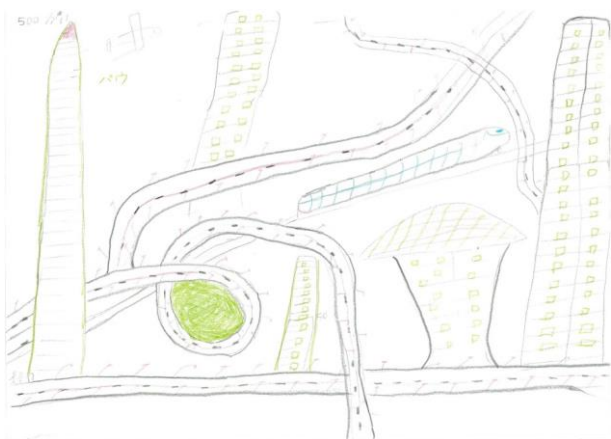


街の写真では、ベルギーや銀座のビルなど西欧風のビルに人気があったが、プノンペンやカンボジアの農村の街も大好きな様子であった。描いてもらった「住みたいプノンペン」の絵では、男の子は高層ビルや飛行機、女の子は山や田んぼなど、自然の絵を描く傾向があった。

## Ⅱ、プノンペン大学におけるワークショップ結果

- 1、世界の街の写真では、「ニューヨーク」が圧倒的に人気だった。
- 2、日本の写真では、「歴史的街並み」が日本らしいという声が多かった。
- 3、東京の写真では、「皇居周辺」、「新宿」、「品川」が順に人気だった。
- 4、子供たちが描いてくれた「住みたいプノンペン」の絵は以下である。

男子生徒①



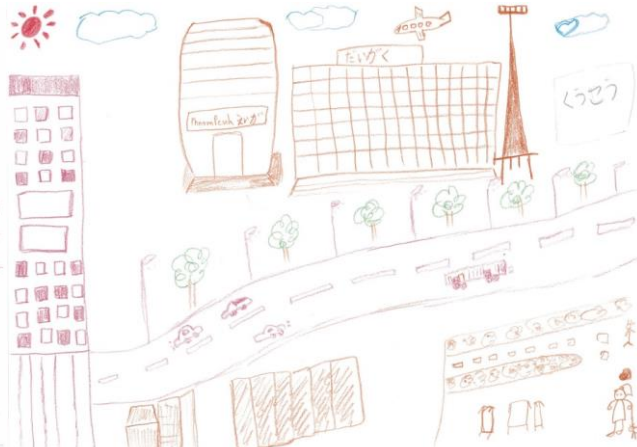
男子生徒②



男子生徒③



女子生徒①





女子生徒②



女子生徒③



街の写真では、ニューヨークや新宿、品川など、高層ビルが人気だった。描いてもらった「住みたいプノンペン」の絵でも、男女問わず高層ビルが多く描かれていたが、並木道や公園など、自然を取り入れたいという声も多かった。「カンボジアを良い国に発展させたい」という情熱を持っている、プノンペン大学の学生ならではの結果だろうか。

## ●まとめ

「都市景観は都市の社会や文化を映し出す鏡である。」

私は卒論研究を通して、このような持論を持っていた。私は今回の調査を通じて、このことが確信に変わった。

プノンペンの街を歩き、さらにはインタビュー調査やワークショップで現地に住む方の声を聞くにあたり、カンボジアという国が抱える様々な問題が見えてきた。これらの問題一つ一つに対処していくことが、結果的に都市景観を美しくすると私は考える。それらの問題の中で、都市景観の観点から見たときに関連性が高いものを三点あげ、以下で見ていく。

### ①廃棄物の廃棄から処理に至るシステムが未熟であること

プノンペンを歩いていると、道の路脇、川沿い、街の至る所にゴミが散乱している。また私は滞在中数日間を、街の中心部から離れたカンボジア人の友人宅に泊めさせてもらったのだが、友人宅のすぐ近くには大きなゴミ山があり、近隣住民は常に鼻につく悪臭にさらされている。友人は「年々このゴミ山は大きくなっている」とも言っていた。道に溢れるゴミは視覚的に街を醜くし、臭いでも人が住みにくい街にしているのだ。

現在は廃棄物の管理に関する国の戦略は存在しないようだ。ゴミの廃棄から処理に至るシステムを整え、道端のゴミがなくなるだけでも、プノンペンは今よりずっと美しく、人々が快適に過ごせる街になるであろう。

## ②街に緑や公園が少ないこと

プノンペン大学の生徒にワークショップを行った際に、「プノンペンには緑や公園が少ない」という声が非常に多かった。生活のそばに緑やきれいな水といった自然があり、人々が休み子供が遊べる公園があることは、人間の心を豊かにする。街路樹や公園はあらかじめ計画しなければ確保できない。プノンペンでは新しいビルが次々に建てられている最中であり、利益目的の商業施設よりも優先的に緑地を確保する必要がある。

## ③交通システムの構築が発展途上であり、車線が無秩序であること

プノンペンの車道は車線の引かれていないところが多く、車やオートバイ、トゥクトゥクが無秩序に溢れかえっている。また歩道を妨げる車の路上駐車も問題となっている。車が走っていい場所、停めていい場所が決まれば、ぐちゃぐちゃした道路はすっきりし、人々も安心して街を歩けるだろう。

### 「発展しているように見える不平等な社会」

都市景観と直結する問題ではないのだが、カンボジアの「不平等」の問題についても触れておきたい。現在、カンボジアでは土地開発によって、元々住んでいた住民が立ち退きを強いられる問題が深刻化しており、これはカンボジアが不平等社会であることを実に示している問題である。以下は、東京大学の山田氏に提供していただいた資料<sup>1</sup>を参考になっている。

カンボジアは 1994 年から 2004 年の 10 年間で、貧困割合が 47%から 35%に減少しており、表面的には順調に社会発展を遂げているように映る。しかし、カンボジア社会経済調査の世界銀行による分析結果をみると、1994 年から 2004 年の 10 年間で、一日あたりの消費額が富裕層で 45%増加しているのに対し、貧困層はわずか 8%しか成長していない。この結果から、経済成長は国内の富裕層がさらに裕福になったことによってもたらされたものであり、貧困層は依然として貧困であることが窺える。そのような貧富の格差を生み出す一つの大きな要因として考えられるのが、土地所有面積の不平等である。

そして、土地所有の格差を招く最大の要因となっているのが、「経済的土地利用権」(Economic Land Concessions=ELC) である。この 10 年余りのうちに、カンボジアの広大な土地が ELC の名の下に政府から企業に譲渡されている。ELC は、政府から企業に対し、最長 99 年間で与えられる独占的な土地利用の権利で、所有権は付与されないものの、契約期間中は土地の譲渡権も与えられ、利用権の又貸しや転売も可能である。企業とそれに関与する政府高官や政治家が巨額の利益を得ていると見られるが、一方地域住民への影響は深刻であり、居住していた村からの立ち退きが強制され土地が企業に譲渡されている。中には抵抗する住民に対し、警察や軍隊、私設警備隊が発砲、放水、暴力による鎮圧を行ったという NGO からの報告もある。

持続的な社会発展のためには、国民が健康であることは第一条件である。開発途上国においては、商品化された土地の市場が増大するにつれ、地元住民が被害を被るケースが増大している。2001 年に 2 回目の土地法が作られたことで、土地の登録手続きが整いつつあるのは、明るい兆しである。

### 「日本ができること」

私はやはり現在のプノンペンの姿と、戦後の東京が重なってならない。カンボジアでは未だ景観法は作られておらず、景観に関する法整備が整うのはこのままでは 30 年、50 年先になるのではないかと思います。

えた。日本で景観法が施行されたのも、2004年12月、つい10年前のことである。戦後、長い間人々の関心が景観に払われることはなかったのだ。国民の生活水準が低いうちは何よりも“経済発展”が最優先にされるのであり、建築や看板に関する規制は、自分たちで必要だと気付くまで時間がかかるかもしれない。しかし繰り返し言うが、都市景観は都市の社会や文化を映し出す鏡であり、景観を整えるものは何も景観法だけではない。

プノンペンでは、ゴミ処理や交通のシステムが未熟であることが街の景観を悪くしている。これらの問題は“都市景観”という美的な問題以上に、市民の命、健康に直結する喫緊事項である。そしてこうした現状の背景には、モノやお金をもらっても「どう使うかがわからない」という問題があるように感じた。日本は日本でカンボジアとは全く異なる社会問題が山積しているが、持っている社会インフラのノウハウを開発途上国に教えて、現地の人ができることを増やすべきだ。人に優しい街は、美しい。少しずつ都市の諸問題が改善されれば、街も同じように少しずつ美しくなっていく。

## ●おわりに

私が「カンボジアが独自の美しさを失わないで欲しい」「外国から与えられたものに染まらないでほしい」と言えるのも、私が日本で明日のご飯を心配することもなく、毎日温かい家で眠ることができているからだろう。だが、私はインタビューの際にある方が仰った言葉が心に残った。「人間関係と同じで、既に経験して知っている者が、知らない者に教える」ということ。ひとりではできることには限りがあるけど、誰かの力を借りて協力し合えば、できることはいくらかでも広がる。人間と同じではないか。

まちづくりにおいて何よりも重要であるのが、住んでいる市民が「自分たちがまちづくりの主体である」と自覚することである。自分たちが協働して街の景観を整えていると実感できれば、きっと愛着や充実感は増すだろう。市民がどれだけ都市や環境全体への意識を持っているかが、重要なのである。私が子供たちにプノンペンの理想像を描いてもらうワークショップを行ったのも、そのような考えからだ。

世界では、高層ビルは国力の象徴とされる風潮がある。私もニューヨークの摩天楼には憧れたのであり、行ったことのない国に憧れを持つことが悪いことだとは思わない。しかし、愛する家族や友人に囲まれていたら幸せなように、自分の生まれ故郷を誇りに思えたら人はもっと幸せではないか。プノンペンに住む人々が、胸を張って自分の街を愛せる日がくることを願う。

最後に、この度インタビューをさせていただいた方は、どなたもカンボジアに住んでいる“人”のことを真剣に考えて、懸命に働かれているばかりだった。私は卒業論文や当報告書で、「こうするべきだ」とは言えるが、現状を変えることは簡単なことではない。実際に問題に向き合う方々がどんな想いでどれだけ苦労されているのか、間近で感じることはできたことは大変貴重な経験である。またワークショップで出会った大学生と話をしていると、「この子たちが今後のカンボジアを担っていくのなら心配ないじゃないか…!」と思える程であった(なぜなら彼らはちゃんと教育を受けることができてきた子達。今回の調査では教育がいかに大事かを思い知らされた)。社会に出る前に、こんなに価値ある出会いのきっかけをいただけたことに、心から感謝したい。

私は来月からPR会社で働くことになる。世の中にはどんなに一部の人が頑張っても、世間一般の、多くの人々の意識が変わらないと動かないことが沢山あると思う。例えば、「ゴミは川に捨てるものじゃない」、「バイクに乗るときにヘルメットを被らないのはこんなに恐ろしいことなんだ」、そんな意識が市民に芽生えるだけでも、問題が良い方向に動き出すかもしれないのだ。PRの力で社会問題解決に貢献することが、今の私の夢である。そしていつか、その夢をカンボジアで叶えられたなら最高に嬉し

い。

インタビューやワークショップにご協力いただいた方々、今回の機会をくださった共立国際交流財団の方々、心からありがとうございました。

#### 参考資料

---

<sup>1</sup> 佐藤菜穂『カンボジアの土地集約化—格差拡大の要因とその現状』(アジ研ワールド・トレンド No.147) 2007 年。